

海外研修レポート 感想

10月21日（水）午前

訪問先：ラインランド・ファルツ州環境省：環境情報センター

講師：Michael Staaden（ミヒャエル・シュターデン）

Dr. Peter Disht（ペーター・ディール）

シュターデンさんから、州の環境省の全体の組織の概要と取り組みについて説明があった。日本との大きな違いは、中央集権である日本に対して、ドイツ16州の連邦国家であるため、州の独自の自治を持っていること。そして、環境省が関わる領域が日本とは全く異なっているということだ。環境省は、日本でも自然保護や自然公園、環境問題が主な取り組みだが、この州では、それに加え農業・食料・ワイン・森林も環境省が関わる重要な領域であった。以前はエネルギーも環境省が取り組んでいたという。それらの様々なプロジェクト事業の計画、組織化、実現化、統制、支援・援助などを行っているという

ディールさんからはライン川の水質浄化の取り組みについて説明があった。

シュターデン氏が最後に発言した「持続可能な暮らしを実現するために、変革しなければならない」。これが時代を迫って、市民はもちろん政府も変革してきたということだと実感した。環境省という役所の部署ができたのは1980年代で決して日本が遅いわけではない。過去の出来事から学ぶという姿勢が、行政が取り組む環境という領域を重要なことであると認識を変化させてきていた賜物だと感じた。

（佐々木 豊志）



環境省にて迫力の講義



講師のミヒャエル・シュターデン氏

10月21日（水）午後

訪問先：ドイツ自然保護連盟（NABU）ヘッセン州支部

ベンツハイム自然保護保護センター

講師：ゲルハルト エプラー氏

採石場の跡地をNSBU自然保護センターとして使用するにあたっては、会員からの半分の寄付が使われています。ここでは、組織運営 資金調達 人材育成 広報 自然保護とたくさんの学びがありました。まず、NUBUの組織図の説明を受けました。そして理事の半分は女性を起用、若い学生の

起用もあります。このように老若男女をミックスして起用しています。資金調達の点では、企業にパートナーシップを求めるときには、環境に対してどんな理念を持っているかをリサーチしてから、コンタクトをとること。また、寄付金は団体にではなく、地域の活動のプロジェクトに対しての寄付が募りやすい。その場合に目的をはっきりさせる事。その後も特別なフォローする事では信頼関係を構築していく事が必要である。広報活動を通じて団体の活動の見せる化を紙媒体だけではなく五感で表現している。 広報活動は、楽しく客観的に伝える事。例えば、委託会社に、任せて、新聞広告を出す。その場合は顔写真を記載して、この様な者が勧誘に伺いますと個別に家のドアを叩く。これは法律で決められている。ここまでしっかりと寄付を集めるといふ徹底した勧誘に驚きを感じた。 自然保護では、コウモリの巣作りに協力している家には、ステッカーを配るなど工夫の様子を見る事が出来ました。人材育成は若者を積極的に育てているところがやはり日本と同様でした。「望むものは、紙に書いて引き出しに入れておきなさい。きっと誰かが運んできてくれるよ」と言っていました。子供たちにとっては、プログラムはあたえてなく、五感を使い、自らが楽しさを感じ、ストレスをリセットできる場所であると感じました。

(小倉 加代子)



ベントツハイム自然保護保護センターの説明を受ける



コウモリの巣箱を観察

10月22日(木) 午前

訪問先：ボイムリングゲ森のようちえん

園児数；20人

保育者：3人（うち1名はFÖJ という自由意志環境ボランティアの実習生、1人は保育士になりたい研修生。あとは園長先生。）

財源：マインツ市からの助成、ラインラントファルツ州からの助成、保育料

保育時間：7：45～13：15最近はお昼を食べてから帰ることもでき、14：30まで。

立ち上げと歴史：保護者の自主保育から始まった。開園3年目で認可をうけた。

以下質問と答え

Q. スタッフがやむを得ない理由でお休みをとるときはスタッフは足りないのか？

A. 保護者のお手伝いリストがあり、そんな時は保護者に手伝ってもらう。

Q. 広報活動は？

A. 口コミがあるので特に力を入れていないが、プレ保育と年に一回産婦人科に宣伝する機会がある。特徴：

創立11年で3年目に認可を受けた。当時はウェイティングリストがあったが、短い保育時間では

共稼ぎの家族にとってニーズが合わない。

なぜ森での保育なのかという点を「森のようちえんの効果」をまとめたデータを含めてまとめて行政の理解を仰いだり、園児の入園に結びつくような広報の必要性を感じた。

(藤井朋子)



朝のつどいを視察する研修生



森の中で自由に遊ぶ子供たち

10月22日(木) 午後

訪問先：ファンドレイジングアカデミー

講師：リットショッフエル氏

近年では、ドイツも日本と同じで、税の減少により財源確保が必要とされている。ファンドレイジングアカデミーは、時代の変化にあった、人材の養成を担っている。まず、ファンドレイジングの歴史と概念を学んだ。そして、さらにファンドレイジングの手法と考え方の講義を受ける。寄付者、興味を持って頂く→客観的分析→プランニング→手段の選択→実現→振り返が必要と話された。手段は色々あるが、人と人とのコネが必要と考える。さらに、地域の名手に相談しなさい。彼の言葉からは『常にアイデアを紙に書いて持っていなさい』と話される。スポンサーに対しては、常にケアが必要で、スポンサーシップをしっかりと『見える化』が必要であり、そこに資金提供の関係だけではなく信頼がある。例えば、恋愛と同じだと考える。NPOは、資金が潤沢にあるわけではない、直接事業の専門性に対するも信頼性はもちろんの事、その目的を達成する組織運営に(RUN NPO) 中長期の経営的意識が車の両輪の様に必要である。ここでは、手段とともに考え方をしっかり学んだ。

(小倉 加代子)



熱弁する講師のリットショッフエル氏



資金調達のヒントをメモする研修生

10月23日（木）午前

訪問先：ドイツ環境保護連盟（BUND）ラインランド・ファルツ州支部

講師：Mr. Ullrich（州事務局職員）

—自然の中で生きていく“人”の将来のために—

BUND（ドイツ環境自然保護連盟）は、1973年ラインランド・ファルツ州に原発の話が持ち上がった際、その地域住民の問題意識による反対の声が上がった時期にできました。この40年ほどで、会員数が約50万人になった環境保護団体です。

目標達成のために大事にしていることとして、①広報活動②環境教育③行政政策・開発への提言等があります。この③の提言する姿勢は、資金面や信条の独立によるものです。たとえば、資金は寄付と会費収入だけで67.5%（2013年度）。行政からの委託金は、0.6%で、あくまでBUND側から提案を持ちかけて得たものだそうです。また信条については、「個人の政治・宗教的なものから独立し、一つの政党とつながらず、公平な立場を保つからこそ批判することができる」という言葉に表れていると思います。

マインツ市でエネルギー確保のために火力発電計画があった際、BUNDは代替エネルギーとして水力ポンプ発電を提案しました。今では計画段階で行政から相談を受けるそうです。

《①資金・信条的中立性②専門性ある提言③会員数を政治的戦略の力へ》この3つのポイントが、BUNDの実行力の源と思いました。このように、反対するだけでなく提言するBUNDの姿勢は何のためなのでしょう。その答えとして、州事務局のウーリッヒさんの言葉が心に残りました。「工業化ではなく、自然の中で生きる“人”が将来なんです。将来というのは、貧富に関係なく住民すべてのためなのです。」

市民社会のボトムアップの声を“質と量”を兼ね備えて束ね、実行力に変える。ドイツが環境先進国といわれる理由は、BUNDのような市民団体の教え導く姿勢にあると感じました。

（泉香苗）



BUNDの組織構造の説明を聞く



貿易協定も活動の一部

10月23日（木）午後

訪問先：ヘッセン州環境ボランティア研修制度（FOJ）

講師：Ms. Steinweg

—環境は、すべての人材育成の根っこ—

環境ボランティア研修制度（FOJ）とは、ドイツにおいて16歳から26歳まで義務教育終了後将来の可能性を見つけるために、研究所・農家・園芸・都市開発プランニング・広報等の現場で体験で

きる国の制度です。

州ごと若干違いがありますが、若者の自由意志に基づいて応募・マッチングの結果、1年間研修に参加できます。ヘッセン州では一年間の応募者は約400名。その期間、連邦政府から200ユーロ/月、ヘッセン州から147ユーロ/月が支払われます。お小遣いとして150ユーロ/月、研修受入れ先から、住居・食事の提供、社会保障完備、セミナーへの参加費無料など手厚い制度に、若者の環境への関心を高めるようとする国のねらいすら感じます。

実は、この制度はフランスとの交換留学生の例だけでなく、ドイツ語を話すことができれば、どの国の若者にも開かれた機会なのです。ドイツの人材育成の“厚み”に感激です。

パルメンガルデン（植物園）のガイドを自ら引き受けた研修生は、過去の研修生の話をもとに前もって自ら調べて「五感で体験することが大事と思ったから」と、カカオやユーカリの葉の試食等体験型のツアーを組んでくれました。終始研修生を、事務局のウルリケ・シュタインベックさんが微笑ましく見守っていたのが印象的でした。「まずは一人でやってみる」環境と受入れ側の信じる気持ちの人が育てることを教えてくれました。例え、研修生がその後どんな仕事を選んだとしても、それぞれの分野で環境活動の経験を活かしてくれる可能性を感じ、“環境は人材育成の根っこ”と思いました。

(泉香苗)



環境ボランティア研修生の案内を受ける



環境ボランティア研修制度事務局ウルリケ女史

10月24日（土）午前

訪問先：ドイツ環境保護連盟（BUND）ノルトラインヴェストファーレン州支部（デュッセルドルフ）

講師：ケイスティン

ノルトラインズフェーレン州のBUNDの活動について伺った。州支部に2500名を超える会員とともに地域に根ざした活動を展開している。会員、市民からあがる声を集約しボトムアップで民主主義的に社会問題の解決の取り組みを幾つか紹介してくれた。行政を監視する役割と言う、都市計画や道路計画など行政が進める公事業にチェックを入れている。環境を守るだけではなく、裁判まで辞さない活動にも広げて行っているという。原子力発電に反し農園の企業化環境省の全体の組織の概要と取り組みについて説明があった。基本的な活動の姿勢は、エネルギー政策では原子力発電に反対し、また、遺伝子組み換えに反対し食物に関する食育に取り組んでいる。運営費は会員の会費と寄附から成り立ち、一切行政からお金をもらっていないので行政へ反対意見を述べ批判ができる。2011年福島原発事故をきっかけに、ドイツの原発17基の全廃へむけて動き出した。農業にも意見

し、地下水をも汚染する大型養鶏、養豚に反対をして、小規模の有機農業を推進している。

(佐々木 豊志)



BUND の歴史や州支部の取組みを学ぶ



州支部副代表のケイスチン女史

10月24日（土）午後

訪問先：ドイツ環境保護連盟 (BUND) ノルトラインヴェストファーレン州支部(デュッセルドルフ)
ガイツバイラー炭鉱 (ノルトラインズファーレン州デュッセルドルフ郊外)

講師：ピロツティア・シューベルト (エコロジスト)

BUND ノルトラインズファーレン州支部が長年取り組んでいる反対運動に触れた。私にとって今回のドイツ研修で最もショッキング場所となった。環境先進国と呼ばれているドイツのエネルギー政策の裏と表を知らされた思いだ。原子力発電の全廃を選択しているが、CO2 を大量に排出する石炭火力発電を続けている。そのために、掘り続け、数カ所の街に移転を迫り、歴史ある地域のコミュニティをも壊している。国内に数カ所の石炭の露天堀の鉱山があり火力発電所を稼働している。長年露天堀と街の移転の反対運動をす勧めて来たが、2年前に全村移転になった街を案内された。民主主義って何だろうと根底から考えさせられた。この街では、移転に反対1/3、反対1/3、どちらでも良いが1・3。絶対大敵多数がなければ、行政や大企業が進める事業変えることができない現実を知らされた。この日、ドイツ在住の知人にこの事態を知らせたら、知らなかった。ドイツ人でも半数の人は知らないという。翌日こんなメーツが届いた。「石炭の露天掘りの話をドイツ人の夫に話したら、デュッセルドルフ以外にも数箇所あるそうです。そのうちの4箇所は国が買い取り採掘を停止したとのですが・・・環境先進国ドイツは、原発廃止して火力発電に頼るのではなく、自然エネルギーの開発に力を入れてほしいものです」一部の露天堀を停止する決定のニュースで少し救われたが、今後もドイツのエネルギー政策を注視したい。

(佐々木 豊志)



炭鉱現場視察をする研修生



ガルツバイラー炭鉱



遮断された高速道路

10月25日（日）午前

訪問先：ドイツ自然保護連盟（NABU）ヘッセン州 ラインナウアー自然保護センター

講師：エーゲリング所長

ビンゲン郊外にあるドイツ自然保護連盟(NABU)ヘッセン州 ラインナウアー自然保護センターへ。解説者のエーゲリングさんは18年前からセンター長です。この地域は川の水が増えると川の周囲が湿地帯になる環境です。16年前からカエルのロゴを使用する会社との協働事業が行われています。センターではカエルの生息に適した環境の保全を目指しています。企業はカエルの生息地を守る事業に対し、企業のイメージアップの一環として資金提供を行っています。このように協働が長く続いていることは、双方の利害が一致していることの表れだと思います。自団体でもこのようなパートナーシップを結ぶことができるよう事業を提案していくことを考えて実行します。

(佐治真紀)



企業との協働のポイントを聞く



ライン川での取り組みの説明



NABUの保護地域

10月25日（日）午後

訪問先：NABU（ドイツ自然保護連盟） ラインヘッセン地域支部

講師：ライナー・ミヒャルスキー氏

NABUのラインヘッセン地域支部にて、当地でのNABUの活動内容やNPO団体が実施すべき広報活動についての研修を受ける。講師のミヒャルスキー氏によると、NABUのラインヘッセン地域支部の会員数は1万人を数え、事務局は公民館の一室を間借りしながら近隣地域の6つの支部とともに自然に寄り添う活動を進めているという事だった。

自然保護活動に関するイベント等の開催は、平均して年間150回程度実施され、その情報は地域のマスメディアやニュースレター、機関誌を通して地域住民やNABUの支援者らへ届けられている。

新聞や様々なマスメディアに掲載された活動報告の記事は一年間に220件に達し、その広報活動によって継続的な寄付や地域・国の世論を形づくる礎となっている。今回の研修を通して、住民の気付きを促すための広報活動が如何に真摯な姿勢で、おもてなしの心をもって実施されているかを研修生全員が、心に深く刻み込んだ。

(花城篤史)



地域支部の説明をするミヒャルスキー



フクロウの保護をしている証明プレート

10月26日(月)午前

訪問先：ヘッセン州環境省

講師：ハイケ・ブントリッヒ氏(環境省総務部 国際広報課)

Dr. ゼール(環境、地質学担当)

前半はブントリッヒさんからさんから環境省の仕組みについて伺った。

日本では環境の事は、環境省、農業の事は農林水産省と別れているがドイツの場合、政党が変わると、各省の担当する内容が変わってくる。

ヘッセン州環境省は、現在7つの部署に分かれて以下の内容を担当している。

①総務、②廃棄物、③水、土、④気候、⑤食料、物流動物保護、⑥農林、⑦農業です。

一つの省に様々な関連内容のある部署を配置する事で住民に関わる様々な事柄に繋がりを持って対応できるのだと思った。

後半はDr. ゼールさんから水質管理について伺った。

水質管理にとって重要な検査について、水中の化学物質の原因は

- (1) 工業排水によるものなのか
- (2) 生活用水によるものなのか
- (3) その他の原因なのか

特定できると伺った。

環境教育で子ども達に水質保全を伝えたいときに、どういったアプローチから水質保全を説けばよいか、汚染原因によって変わってくることが分かって良かった。

最後にDr. ゼール氏は「これからの世界を持続可能な物にするか、それとも汚染された地球環境にでも適応できるわずかな生物だけが生き残れる世の中にするのか、私達は選ぶ事ができる。」とお話してくださいました。

そして最後に「環境省の皆さんにとってNPOとはなんですか？」という質問に対し「パートナーです。」とお答えいただいた。

私達も良きパートナーシップを築けるよう、誰と手を組むためにどういった広報でアピールし、協力体制を作っていくか計画し、実践していきます。

(藤井朋子)



ヘッセン州環境省の講義



「NPOはパートナー」と語る Dr.ゼール氏

10月26日(月)午後

訪問先：NAHE ネイチャーステーション

ライナー・ミヒャルスキー氏

グラーフエンシュタイン地区にあるNAHEのネイチャーステーションと、その地域でのNAHEについての研修を受ける。グラーフエンシュタイン地区は、武骨な岩壁と木々の紅葉を背景に清流ナーエがとうとうと流れる、ドイツ国内でも生物多様性が一番豊かな地区でとされている。NAHEはBUNDとNABU、地域行政が連携して生み出した自然保護団体で、名称は地域の最大の特徴である清流ナーエに因んでつけられている。

NAHEのネイチャーセンターは、かつて観光産業が全盛だった頃の保養施設の一室を間借りして運営されており、自然生物の展示の他にも地域の歴史を伝える郷土資料館としての役割を果たしている。講師のミヒャルスキー氏は、施設に訪れた顧客を対象に地域の自然の保護を伝える傍ら、環境保全型の経営を行うワイナリーを顧客に紹介するなど、顧客と地場産業をマッチングする事で持続可能な地域の発展に取り組んでいる。彼のガイドを通じて、「自然と人を愛し、地元の発展に貢献する真摯な姿勢」に心打たれた。

(花城篤史)



地域の生きものを展示している
ネイチャーセンター



この施設にも NABU が支援している

10月27日（火）午前

訪問先：アルツェイ森の幼稚園

講師：

公立の幼稚園に森のようちんがクラスが併設

定員：20名（人気のクラスでウェイティングでリストにもたくさんきている。

保育時間 8：10～12：05（延長保育17時まで）

この森の幼稚園はもともと公立の保育園だった。自然教育指導員の資格を持つ保育スタッフからの提案で立ち上がった。

園長が町長にプレゼンをして、町長が議会にもっていき、承認されて始まった事業。その際に保護者がたくさん署名を集めてくれた。行政側にとって幼稚園を許可するかどうかは「森の幼稚園の活動は他の幼稚園と同様の学びが得られるかどうか」という点だった。そこで園長は「同様、それよりも学べるという点」をプレゼンした。公立の幼稚園の感覚が強いのか、森の幼稚園というより森の中のようちえんといった印象が強かった。

こちらは延長保育が17時まで延長保育を受け入れるので、様々な人に間口を広げていると思った。そのせいか人気があり、定員オーバーで待機児童がいるそうです。

（藤井朋子）



森の中で楽しく過ごす子供たち



建物は森林管理局から無償で借りている

10月27日（火）午後

ファンドレイジング特別講義

講師：有限会社 i Funds-Germany ヘルガ・シュナイダー氏

午後は宿泊先ホテル会議室にて、有限会社 i Funds-Germany シュナイダーさんによるファンドレイジング講座。中級者向けの講義でした。ドイツも日本も行政からの資金援助が減少傾向にあります。他からの資金調達が必要です。そのために寄付という手法を学びました。寄付は相手の自発的意思によって行われるものです。人が寄付するには感情が動かなければいけません。と同時に寄付するために号令が必要です。自分たちの活動の何が感情に訴えることができるのか考え、感情に訴えるために目的を明確にします。行動を起こさせるにはダイナミックな表現により呼びかけなくてはなりません。わかりやすいスローガンを作りましょう。その上、寄付によって得られるデータを蓄積していくことの重要性を学びました。目的を達成できなかった時は、次の可能性がわかったと考えれば良いのです。

「どこに行くのか決まっていない船は港に行きつくことができません」と講師も話されていました。



ファンドレイジング(資金調達)の特別講義



真剣にメモを取る研修生